

伝統の技術で湖や里山がよみがえる

市民活動が縦割りを無くす

私たちの身の回りの自然環境の質を上げるためには、これまでのように国や自治体に全て頼ることができません。たとえば、霞ヶ浦の広い流域の水質を良くし、水辺の植生や生き物たちや、美しい風景を取り戻すためには、湖だけでなく、そのまわりの農地、屋敷林、里山、水路や河川、それから都市など様々な空間が果たしている役割を、うまくつないでいくことが大切だからです。

最近では、その「なごぎ」の役割を、NPOなどの市民活動が担うことが多くなってきました。露ヶ浦流域ではNPO法人アサギ基金が中心となって、流域の地域環境保全をアサギプロジェクトと呼称する取り組みを行っています。アサギプロジェクトでは、NPO、国土交通省など行政、研究機関、学校、民間企業、農林産業関係者、市民が、流域・地域の自然環境保全とその活用を協議で取り組んでいます（図1）。その中で、市民活動と私たちが協力している、黒山資源の新しい利用と管理について紹介します。

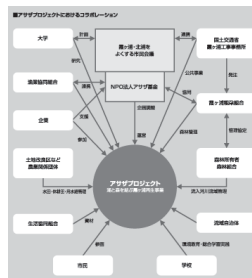


図1：アサザプロジェクトにおけるコラボレーション
(グリーンモアvol.19)

伝統技術を見直そう

霞ヶ湾の海岸は、ほぼ完全に真っ直ぐコンクリートの護岸で覆われていた。そこで、コンクリートでは、海岸が打ち返される波がかなり、水辺の植物は再生できなかりました。そこで、アサザプロジェクトでは伝統的な工法である粗朶（こさ）^① 消波施設を採用することとした。粗朶消波施設とは、スラング時代や戦艦を使った舟の中に、雑木林のフスキ、クナギなどの枝（粗朶）を束にし、湖に配置したもので、粗朶消波施設は、粗朶を通して水が打ち戻すので、波が打ち戻しをやりながら、さらに魚やエビのすみかや産卵場所として大変貴重な意匠になります。最終的には水生植物や砂がたまっていくことで、粗朶消波施設自身が自然消滅していきます。つまり倒壊を終ると、風景の中に溶け込んでいくので（写真1）。

そして、雑木林のクヌギ・コナラなどから粗朶を生産することで、放置されてゴミの不法投棄場所になったり、藪になったりしている雑木林に、新しい価値を見つけて再生することができます。



写真1：マツ材の枠に粗朶を詰めて消波施設を作る

よみがえる里山の風景

霞ヶ浦の粗朶消波施設には、1998年から2001年までの4年間で総延長8,600m、粗朶としては約27万束、28,000m³の枝条が使用されました。これは、百数十haの里山資源の活用につながると換算されますが、実際に流域外からの粗朶持ち込みもあったため、霞ヶ浦流域内では60～80haの里山資源が活用されました(図2、表1)。粗朶を得るための里山の資源活用の方法は、3つのタイプに分けられます。

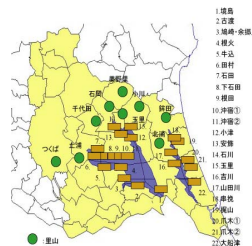


図2：粗朶消波施設および粗朶採取里山

表1：粗糸の使用量

工 期	施設延長(m)	粗梁(m ³)
1998・1999年度	2,085	6,030
2000年度	3,370	9,245
2001年度	3,159	12,950
合 計	8,614	28,225



写真2：ボランティアで密生した
ササを刈り取り



写真3：里山の風景がよみがえった

①粗朶組合の単独事業では、里山1haからおよそ2,000～3,000束(200～300m³)が生産されます。まず林床をおおうアズマネザサの刈り払いを行い、上木は皆伐あるいは択伐施朶を行います。皆伐の場合、粗朶生産だけを考慮するなら最短5～7年で循環できます。

②相乗組合せときの共生生産業者が共同で行う場合、刈り払い後、15～20年周期で皆伐し、萌芽更新を行います。きのこ生産業者が利用できない原木の採取を行い、原木にならない残材のものを相乗に利用します。当地域のきのこ生産業者は、これまで流域域外から原木を購入してきていましたが、協働で原木を生産することにより、約150万円/haのきのこ原木が生産でき、経済効率は高いと言えます。

③粗糲組合と「一日きこり」と呼ぶ里山ボランティアが協働で行う場合、作業効率は低いですが、ボランティア活動により、市民に里山資源活用の大切さ、自然の中での活動の気持ちよさ、人との交流の楽しさなどが体感できます（写真2）。

これらの里山の大半は、何十年間も手入れされずに放置されていた森でした。特に関東地方では、放置されると、アズマネザガが旺盛に生育し、高さ4mにも伸びて、人が踏み入れられないほど密生します。このような森林は、人が利用できないだけでなく、他の生き物たちも住めず、風景も景観も苦しいものになっています。粗雑を生産するなど、新たな山・自然資源の活用により、歩きやすい森になり、森の中に陽が差し込み、野草も増え、風景が良くなっていきます（写真3）。

こうした里山資源の新たな活用と森の持つ様々な機能の向上は、表裏一体の関係にあり、市民活動や研究の重要性はますます高まっています。

<p>＜実行課題＞</p> <p>キイ1a：地域伝統文化の構造解明</p> <p>吉川隆英（企画調整部上席研究官）</p>	<p>研究の森からNo.121号 平成16年2月27日発行</p> <p>編集発行：森林総合研究所企画調整部研究情報広報科</p> <p>〒305-8687茨城県つくば市松の里1番地 TEL：029-873-3211（内線222） FAX：029-873-0844 E-mail：kouho@ffri.affrc.go.jp URL：http://www.ffri.affrc.go.jp/</p>
---	---